

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18330115

研究課題名（和文） 帝国の法的形成に関する比較歴史社会学的研究：「日本帝国」の  
「内国植民地」を中心に研究課題名（英文） A Study of the Legal Formations of Empire from the Viewpoint of  
Comparative-Historical Sociology: Focusing on the Internal  
Colonialism of Imperial Japan

研究代表者

西川 長夫（NISHIKAWA NAGAO）

立命館大学・先端総合学術研究科・講師

研究者番号：00066622

研究成果の概要：

近代としての「帝国」を、その世界的な支配秩序の形成過程に巻き込まれてきた人びとの経験の場から実証的・理論的に捉え直すことを目的とした本研究では、それぞれの「植民地」における個々の歴史的事態を解明するためにフィールドワークを重視した。日本国内と韓国での複数回にわたる国際シンポジウムの開催と現地調査、およびそれらを踏まえた研究交流を通じて「帝国／植民地」の形成過程に関する比較分析を蓄積し、グローバル化時代における「国内植民地主義」の更なる理論化を準備した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,300,000	0	2,300,000
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	5,000,000	810,000	5,810,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：帝国，法，国内植民地，ナショナリズム，グローバル化，移民，国民国家，植民地主義

## 1. 研究開始当初の背景

2001年にニューヨークで起きた9.11事件以降、国民国家を越境するヘゲモニーに対して批判的な側からも、そのようなヘゲモニーを維持・展開しようとする側からも、帝国という言葉が乱発されるようになった。

しかし、これまで一般化していたマルクス＝レーニン主義的な帝国（主義）観からの「揺り戻し」からか、現在の帝国が資本主義システム、主権的な法秩序、国民国家などを基盤

とする、すぐれて「近代」的なヘゲモニーであることすら踏まえない議論が現れている。

他方で、A.ネグリ＝M.ハートの『帝国』のように、帝国に関する新しい理論を抽出する取り組みもなされてはいる。だが、そうした帝国論は「近代」的な帝国像に対して「現代」的な帝国の種差性を抽出しようとするあまり、近代世界のただなかで帝国によって翻弄されてきた人々の歴史的現実が捨象され、過度の抽象に陥ってしまうケースが多かった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、比較歴史社会学的観点により、近代的ヘゲモニーとしての「帝国」の形成プロセスを、そのヘゲモニーに巻き込まれてきた人びとの経験の場から、実証的・理論的に捉え直していくことにある。この目的を達成するために、帝国システムを法的構成体としての側面から考察し、(1) 帝国の法に巻き込まれ「周縁」化されてきた人びとの生活世界が、どのような変容を被ってきたのか、また、(2) 「周縁」化されていく人びとの生活世界との相互作用のプロセスで、帝国というシステムがどのように構成され再編されてきたのか、という観点から実証研究を進めるとともに、こうした実証研究を踏まえながら帝国を捉え直す理論的方法の獲得を目指す。

主たる研究領域は、「日本帝国」にかかわる諸地域であるが、「アメリカ合衆国」をはじめ他帝国にかかわる諸地域との比較研究へも、展開を試みるものである。

## 3. 研究の方法

本研究の特色として以下の4点があげられる。

(1) 帝国を、超歴史的な言葉として用いるのではなく、あくまで「近代の帝国」として捉える視点を堅持すること。

帝国が主権的な国民国家の構成原理を不可避の基盤としていることに留意し、そのヘゲモニーに巻き込まれてきた人々の経験の場を、主権的な法秩序との格闘の場として捉える。

(2) 帝国にかかわる「法」現象を、法律や規則の条文（法文）のみに拘泥せず、法の運用や秩序形成のプロセスに重心を置いて分析すること。

帝国の「周縁」に巻き込まれた人びとの生活世界に対応しながら、主権的な体裁を纏いながらも法がどのように運用され、「周縁」においてどのような独特の社会状況が定着せられていったのかに注目する。

(3) 帝国の法的構成を、「中心」から「周縁」に向けて一方的に制定される法（文）のレベルだけから考えるのではなく、「周縁」と「中心」の相互作用的な関係の中で再構成され続ける、不安定で流動的なシステムとして分析すること。

「周縁」に置かれた主権のエージェントたる出先機関・官吏・将校などが、現地の人々の生活世界に対応しながら崩壊的に発動する法のあり方（の変容）や、「周縁」に置かれたエージェントが「中心」と結び報告・指示関係のプロセスに注目する。

(4) 「周縁」の経験を捉える際、公式的すなわち法文上「植民地」として扱われた領域以上に、「内国」「内地」として処理されていった諸領域の経験にこそ、帝国を捉え直す手がかりがあると考えること。

「日本帝国」において法文上は「内地」として処理された、北海道、沖縄諸島、小笠原諸島など、あるいは、「アメリカ合衆国」において「連邦」内部として処理された、「インディアン」の居住地などに、焦点をあてる。

## 4. 研究成果

具体的な研究成果の内容を年度別に記す。

### (1) 2006年度

2006年度は、主として「日本帝国」の形成過程において主権的な法と生活世界が会い両者の相互作用が展開するプロセスを、「内国」、朝鮮半島、「南洋群島」、小笠原諸島、沖縄諸島を対象に比較検討した。

立命館大学で比較的小規模な研究会を開催したほか、韓国（ソウル）の漢陽大学（比較歴史文化研究所）で開かれたシンポジウム「グローバル化と植民地主義」（9月20日）にも参加した。シンポジウムは西川長夫の「新植民地主義」の概念を中心におこなわれ、韓国からは林志弦、尹相仁、尹海東の三氏が、日本からは西川長夫、今西一、高橋秀寿が報告し、討論がなされた。このシンポジウムの前後（9月19日～24日）にかけてソウル市の都市変容に関する調査をおこなった。

また立命館大学国際言語文化研究所の主催により連続講座「グローバル化と植民地主義」（11月3, 10, 18, 24日, 12月1日）が本研究会のメンバーを中心に企画、実行された。

### (2) 2007年度

2007年度は、前年度の比較研究を継続すると同時に、「日本帝国」における法形成と生活世界の関係を、「アメリカ合衆国」「大英帝国」「フランス帝国」などのそれと比較検討する作業に重点を置いた。

小樽商科大学東アジア研究会との共催により小樽商科大学で開催された「北海道と国内植民地シンポジウム」（8月3日、4日）では、「フランス帝国」史を主たる専門とする平野千果子氏（武蔵大学人文学部教授）を招聘するなどして、植民地や内国植民地という言葉を最初に生み出した北海道の諸問題を他の諸「帝国」との比較史的な観点から報告・討議した。またこのシンポジウムにあわせて、北海道での現地調査も実施した。

前年度の韓国でのシンポジウムと現地調査から引き続く研究交流は、立命館大学国際言語文化研究所と漢陽大学比較歴史文化研究所の共催により、立命館大学で開催された

国際シンポジウム「グローバル化時代の植民地主義とナショナリズム」(10月19日～21日)として結実した。当シンポジウムには漢陽大学の林志弦、尹相仁の両氏のほか韓国から10人ほどの参加者があり、また台湾大学からは周婉窈氏、中国社会科学院からは孫歌氏をお迎えして、グローバル化に伴う新しい植民地主義や新しいナショナリズムの形態、国際結婚(とりわけベトナム花嫁)、引揚者と引揚げ体験の記述およびそれに対する旧植民地出身の人々の反応、などについて率直な討論をおこなった。

(3) 2008年度

最終年度は、比較歴史社会学的な観点から「帝国」の形成過程をそのヘゲモニーに巻き込まれてきた人々の経験の場から実証的・理論的に捉えなおすことを目的として、韓国と日本の川崎市に焦点をあててフィールドワークを実施した。

韓国では群山市と木浦市(10月)、安山市(11月)と二度にわたって調査をおこない、日本では、多文化共生モデル地域とされる安山市との比較から、同じくモデル地域とされる川崎市を現地調査した。韓国の穀倉地帯として知られる群山市と木浦市では、日本人地主の進出と植民地都市の開発による収奪の歴史、そして現代の国家プロジェクトによる産業団地化の実態を調査した。また翌月の安山市の調査では多文化主義政策の転換と移民問題、移民に対する支援活動を調べ、同様の問題として川崎市では朝鮮学校や保育園における民族教育や多文化教育の問題、朝鮮総連川崎支部の共生活動とNPOアリアンの家における養護老人ホームの運営等を調査した。

なお、二回にわたる韓国での調査の前日にはいずれもシンポジウムが開催されており、10月には全北大学校での「世界 地域的实践としてのコメ文明：植民地と脱植民地の視座から」に、11月には漢陽大学での「グローバル化時代のナショナリズムとトランス

ナショナリズム」に参加した。前者においては、西川長夫による基調講演「欧化と回帰：ナショナルな表象をめぐる闘争」のほか、研究分担者として今西一と李姍蓉が報告をし、後者においては、西川長夫の「ナショナリズムと民族主義 孫文とタゴールの民族主義論を手がかりに」のほか、今西一、高橋秀寿、麓慎一がそれぞれナショナリズムや内国植民地に関する報告をした。また川崎市での調査の前日にも西川長夫による講演「多文化共生と国内植民地主義」が横浜国立大学で開かれ、教員、学生、市民を交えた有意義な討論が展開された。

以上の研究報告や現地調査の成果は、『立命館言語文化研究』と、この報告書とは別に印刷した三年間にわたる本科研費の『研究成

果報告書』に収録した。また、2006年度に開催された連続講座をもとに、同じタイトルの書籍『グローバリゼーションと植民地主義』が今年3月に人文書院から出版された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 22 件)

1麓 慎一「日米和親条約締結期における幕府の対外方針について」、『歴史学研究』818号, 2006年, 1-17頁, 査読有

2石原 俊「移動民と文明国のはざまから ジョン万次郎と船乗りの島々」、『思想』990号, 2006年, 94-115頁, 査読有

3米山 裕「アメリカ史記述の越境化と日本人の国際移動」、『立命館文学』597号, 2007年, 144-153頁, 査読無

4今西 一「芸娼妓「解放令」に関する一考察」、『商学討究』第57巻4号 2007年, 103-130頁, 査読無

5西川 長夫「全球化過程中的“新”植民主義的現象(The Phenomena of the New Colonialism in the Process of Globalization)」、『国外社会科学前沿 2006(上海社会科学院信息研究所)』第10期 2007年, 133-142頁, 査読無

6西川 長夫「いまなぜ植民地主義が問われるのか 植民地主義を深めるために」、『立命館言語文化研究』19巻1号, 2007年, 5-16頁, 査読無

7西川 長夫「<新>植民地主義について」、『立命館言語文化研究』19巻1号, 2007年, 213-227頁, 査読無

8今西 一「帝国日本と国内植民地 「内国植民地論争」の遺産」、『立命館言語文化研究』19巻1号, 2007年, 17-27頁, 査読無

9今西 一「近代日本と国内植民地 北海道の事例を中心に」、『立命館言語文化研究』19巻1号, 2007年, 237-242頁, 査読無

10麓 慎一「北千島アイヌの改宗政策について 色丹島におけるアイヌの改宗政策と北千島への帰還問題を中心に」、『立命館言語文化研究』19巻1号, 2007年, 43-55頁, 査読無

11石原 俊「忘れられた<植民地> 帝国日本と小笠原諸島」,『立命館言語文化研究』19巻1号,2007年,57-74頁,査読無

12西川 長夫「パリの六八年」,『環【歴史・環境・文明】』Vol.33,2008年,96-98頁,査読無

13西川 長夫「《討論から》」,『野間宏の会報』No.15,2008年,106-109頁,査読無

14西川 長夫「方法としての旅」,『立命館言語文化研究』20巻2号,2008年,137-138頁,査読無

15西川 長夫「グローバル化に伴う植民地主義とナショナリズム」,『立命館言語文化研究』20巻3号,2009年,47-55頁,査読無

16米山 裕「太平洋史の可能性 太平洋の島々と環太平洋地域から日本人の国際移動を考える」(特集 連続講座「国民国家と多文化社会」第18シリーズ 環太平洋における移動と労働),『立命館言語文化研究』20巻1号,2008年,3-7頁,査読無

17今西 一「平野義太郎の「大アジア主義」」,『人文研究』(小樽商科大学)第115号,2008年,23-38頁,査読無

18今西 一「早稲田大学・1950年:歴史の証言・吉田嘉清・竹内良能氏に聞く」,『立命館言語文化研究』第20巻3号,2009年,209-260頁,査読無

19石原 俊「そこに社会があった 硫黄島の地上戦と<島民>たち」,『未来心理 Mobile Society Review』(NTTドコモ・モバイル社会研究所)15号,2009年,26-35頁,査読無

20石原 俊「論潮 1月:再帰的実践の回路の再構築 社会を観察し記録し発信することの意味とは」,『週刊読書人』2770号,2009年,3-3頁,査読無

21石原 俊「論潮 2月:暴力の移譲に抗して 生存と自律のための思考を歴史化する試み」,『週刊読書人』2774号,2009年,4-4頁,査読無

22石原 俊「論潮 3月:主権の分散化・遍在化 ガザ-アフガン-ソマリア沖を結びつけるもの」,『週刊読書人』2779号,2009年,4-4頁,査読無

〔学会発表〕(計 19 件)

1西川 長夫「いまなぜ植民地主義が問われるのか」,『連続講座「国民国家と多文化主義」第17シリーズ グローバリゼーションと植民地主義」,『いまなぜ植民地主義が問われるのか』,2006年11月3日,立命館大学

2今西 一「帝国日本と国内植民地 北海道の事例を中心に」,『連続講座「国民国家と多文化主義」第17シリーズ グローバリゼーションと植民地主義」,『いまなぜ植民地主義が問われるのか』,2006年11月3日,立命館大学

3麓 慎一「北千島アイヌの改宗政策について 色丹島におけるアイヌの改宗政策と北千島への帰還問題を中心に」,『連続講座「国民国家と多文化主義」第17シリーズ グローバリゼーションと植民地主義」,『国内植民地をめぐる』,2006年11月10日,立命館大学

4石原 俊「これは植民地なのか」,『連続講座「国民国家と多文化主義」第17シリーズ グローバリゼーションと植民地主義」,『国内植民地をめぐる』,2006年11月10日,立命館大学

5米山 裕「19世紀のアメリカ合衆国から新 植民地主義を振り返る」,『連続講座「国民国家と多文化主義」第17シリーズ グローバリゼーションと植民地主義」,『反植民地 反グローバル化運動』,2006年11月24日,立命館大学

6西川 長夫「グローバル化と国内植民地について」,北海道と国内植民地シンポジウム,2007年8月3日,小樽商科大学札幌サテライト

7今西 一「北海道史の新しい見方」,北海道と国内植民地シンポジウム,2007年8月3日,小樽商科大学札幌サテライト

8西川 長夫「東北アジア共同体のアイデンティティと文明的原理」,国際学会「東アジア協力への模索:ナショナリズムと普遍主義の調和」,2007年9月10日,(韓国)ソウル

9西川 長夫「グローバル化に伴う植民地主義とナショナリズムの変容」,国際シンポジウム「グローバル化時代の植民地主義とナショナリズム」,2007年10月3日,立命館大学

10西川 長夫「ヴァナキュラーな言語 (vernacular language) と教育言語 (国語)

グローバル化のなかの言語とアイデンティティ」,2007 応用外国語国際シンポジウム, 2007 年 12 月 7 日,(台湾)高雄第一科技大学

11西川 長夫「<新>植民地主義・再論」,台湾大学歴史学研究所 講演会,2007 年 12 月 13 日,(台湾)台湾大学

12西川 長夫「差異とアイデンティティのための闘争の先に見えてくるもの タゴールの反ナショナリズム論とイリイチの「ヴァナキュラーな価値」を手がかりに」,シンポジウム「多文化主義と社会的正義におけるアイデンティティと異なり」,2008 年 2 月 18 日,立命館大学

13西川 長夫「欧化と帰帰: ナショナルな表象をめぐる闘争」,国際シンポジウム「世界 地球的实践としてのコメ文明: 植民地と脱植民地の視座から」,2008 年 10 月 16 日,全北大学校(韓国)

14今西 一「近代日本の土地改革」,国際シンポジウム「世界 地球的实践としてのコメ文明: 植民地と脱植民地の視座から」,2008 年 10 月 16 日,全北大学校(韓国)

15李 婉蓉「文明化における郵便制度の役割: 台湾と朝鮮の事例によって」,国際シンポジウム「世界 地球的实践としてのコメ文明: 植民地と脱植民地の視座から」,2008 年 10 月 16 日,全北大学校(韓国)

16西川 長夫「ナショナリズムと民族主義 孫文とタゴールの民族主義論を手がかりに」,国際シンポジウム「グローバリズムの時代のナショナリズムとトランス ナショナリズム」,2008 年 11 月 14 日,漢陽大学(韓国)

17今西 一「社会主義的国内植民地の「遺産」」,国際シンポジウム「グローバリズムの時代のナショナリズムとトランス ナショナリズム」,2008 年 11 月 14 日,漢陽大学(韓国)

18高橋 秀寿「犠牲者ナショナリズム」概念の歴史学的検討」,国際シンポジウム「グローバリズムの時代のナショナリズムとトランス ナショナリズム」,2008 年 11 月 14 日,漢陽大学(韓国)

19麓 慎一「世界化時代におけるアイヌ民族と「先住権」」,国際シンポジウム「グローバリズムの時代のナショナリズムとトランス ナショナリズム」,2008 年 11 月 14 日,漢陽大学(韓国)

〔図書〕(計 13 件)

1西川 長夫『新 植民地主義論 グローバル化時代の植民地主義を問う』,平凡社,2006 年,271 頁

2今西 一『遊女の社会史』,有志社,2007 年,272 頁

3米山 裕、河原典史 編『日系人の経験と国際移動 在外日系人・移民の近現代史』,人文書院,2007 年,276 頁

4石原 俊『近代日本と小笠原諸島 移民の島々と帝国』,平凡社,2007 年,533 頁(第7回日本社会学会奨励賞〔著書の部〕受賞,2008 年 11 月)

5西川 長夫『日本帰帰・再論 近代への問い,あるいはナショナルな表象をめぐる闘争』,人文書院,2008 年,313 頁

6西川 長夫「招聘講演 差異とアイデンティティのための闘争の先に見えてくるもの タゴールの反ナショナリズム論とイリイチの「ヴァナキュラーな価値」を手がかりに」,立命館大学グローバルCOEプログラム「生存学」創成拠点『生存学研究センター報告4「多文化主義と社会的正義におけるアイデンティティと異なり コンフリクト/アイデンティティ/異なり/解決?」』(英訳「Beyond the Struggle for Difference and Identity Tagore s Anti-nationalism and Illich s “Vernacular Values”」Trans. By Nore McCormack 同号所収),立命館大学生存学研究センター,2008 年,309-326 頁(英訳 327-346 頁)

7今西 一 編『世界システムと東アジア 小経営・国内植民地・「植民地近代」』,日本経済評論社,2008 年,7-26,132-148,263-266 頁(総 268 頁)

8西川 長夫「いまなぜ植民地主義が問われるのか 植民地主義論を深めるために」,西川 長夫・高橋 秀寿 編『グローバリゼーションと植民地主義』,人文書院,2009 年,7-40 頁(総 376 頁)

9今西 一「国内植民地に関する覚え書」,西川 長夫・高橋 秀寿 編『グローバリゼーションと植民地主義』,人文書院,2009 年,107-123 頁(総 376 頁)

10麓 慎一「千島列島の内国化と国際的環境 片岡侍従の千島派遣を中心に」,西川 長夫・高橋 秀寿 編『グローバリゼーション

と植民地主義』,人文書院,2009年,125-143  
頁(総376頁)

11石原 俊「市場・群島・国家 太平洋世界  
/小笠原諸島/帝国日本」,西川 長夫・高  
橋 秀寿 編『グローバリゼーションと植民  
地主義』,人文書院,2009年,145-168頁(総  
376頁)

12高橋 秀寿「占領・植民地化・セクシャリ  
テイ ドイツと日本」,西川 長夫・高橋  
秀寿 編『グローバリゼーションと植民地  
主義』,人文書院,2009年,333-352頁(総376  
頁)

13今西 一 『近代日本の地域社会』,日本経  
済評論社,2009年,318頁

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

西川 長夫(NISHIKAWA NAGAO)  
立命館大学・先端総合学術研究科・講師  
研究者番号:00066622

### (2)研究分担者

米山 裕(YONEYAMA HIROSHI)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号:10240384

高橋 秀寿(TAKAHASHI HIDETOSHI)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号:70309095

今西 一(IMANISHI HAJIME)  
小樽商科大学・商学部・教授  
研究者番号:20133621

麓 慎一(FUMOTO SHINICHI)  
新潟大学・教育人間学部・教授  
研究者番号:30261259

石原 俊(ISHIHARA SYUN)  
千葉大学・大学院人文社会科学研究科・助教  
研究者番号:00419251

宮下 敬志(MIYASHITA TAKASHI)  
立命館大学・衣笠総合研究機構・ポストドク  
トラルフェロー  
研究者番号:50509346

李 珮蓉(RI HAIYO)  
立命館大学・衣笠総合研究機構・ポストドク  
トラルフェロー  
研究者番号:00516809

## (3)連携研究者